

不識庵機山を撃つの図に題す（頼山陽）

鞭聲 肅々 夜 河を 過る

暁に 見る 千兵の 大牙を 擁するを

遺恨 十年 一劍を 磨き

流星 光底 長蛇を 逸す

鞭聲肅肅夜過河 曉見千兵擁大牙
遺恨十年磨一劍 流星光底逸長蛇

解説 川中島の戦いで上杉謙信が武田信玄を撃つ図を見て作った詩。

語釈 ※不識庵〓上杉謙信。※機山〓武田信玄。※肅肅〓静かなさま。※河〓犀川。※暁見〓武田方が見た。※大牙〓大将の旗。※擁〓抱く、守る。※十年〓謙信がはじめて信玄と兵を交えてからおよそ十年。※流星〓剣光のきらめくさま。※光底〓斬りつけた剣の光の下。剣光の真下。※長蛇〓大蛇。信玄にたとえた。※逸〓とり逃がす。

通釈 静かに鞭音も立てないようにして（上杉謙信の軍は）、夜のうちに犀川を渡って攻め寄せた。武田方は、明けがた大軍が大将の旗を中心に守りながら迫ってくるのを見つけた。遺恨十年、剣を研ぎ澄ましていた謙信にとって、流星光底の下に、ついに強敵信玄をとり逃がしたのは残念至極なことであった。